

## 比較文化Ⅱ [第5回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

### ●イギリスにおけるパキスタン移民

#### ▼かつての植民地から移民が急増

1962年の新移民法施行の前に、駆け込み的に旧大英帝国内からの移民が流入

インド、パキスタン、西インド諸島など

1951年は25万6000人 → 1961年は54万1000人に

1951年の時点ではパキスタン系はわずか5000人

→ 1966年には11万9700人に増加

2001年の国勢調査では、パキスタン系は65万516人

当初は男性中心だったのに、家族を呼び寄せたり、英国で結婚して家庭をもち、現在は男106対女100になっている

#### ▼イギリスのなかのパキスタン

パキスタン系の87%が、4つの地域に集中

南東部 (30%)、中西部 (21%)、ヨークシャーとハンバーサイド (20%)、北西部 (21%)

もっとも人口が多いのが、バーミンガム (9万7510人)、次いでブラッドフォード (6万1638人) (ともに2001 Census)

パキスタン人は地域にコミュニティをつくって、そのなかで暮らしている

ここはイギリスではなく、パキスタンそのもの (ブラッドフォード→ブラディスタン)

映画『ぼくの国、パパの国』の主人公のカーン一家が住むのは、マンチェスターのサルフォード地区

#### ▼移民の集中が社会問題を引き起こしている

特定地域への集住が、住宅や教育、職業選択において、やっかいな問題を引き起こしている

住宅難、就業機会の制約、学校の教室不足、学校の隔離化

コミュニティの人たちは、20年も英国で暮らしながら、英語が話せない

それがいつその就業の困難さを生むという悪循環になっている

#### ▼難民と移民の違い

難民とは、難民条約によると「人種、宗教、国籍、政治的意見などの理由で、自国にいと迫害を受けるか、あるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた人」(難民条約)

難民として認められると、その国の国民と同等の地位を与えられる

移民とは、仕事や教育、よりよい生活環境などを求め、国境を越えて定住する人を指す。自国での迫害があるかどうか、難民と移民の違い

### ●映画『ぼくの国、パパの国』に見るパキスタン移民の暮らし

#### ▼ぼくの国、パパの国 (原題: east is east)

DVD: キングレコード株式会社 KIBF78 (本編97分+特典44分)

監督: ダミアン・オドネル

製作: レズリー・アドウィン

原作・脚色: アユーブ・カーン=ディン

1999年カンヌ国際映画祭監督週間正式出品／1999年モントリオール国際映画祭出品／1999年トロント国際映画祭出品／1999年カンヌ国際映画祭監督週間正式出品／1999年英国アカデミー賞 最優秀英国映画賞受賞／1999年イヴニング・スタンダード紙英国映画賞 最優秀映画賞受賞／2000年カンヌ国際映画祭 第1回メディア賞受賞

#### ▼配給元による公開時の紹介文より

1971年、英国マンチェスターの小さな街・ソルフォードを舞台に、パキスタン人のパパ、イギリス人のママ、そして6人の息子とひとり娘が繰り広げるひと騒動を笑いと涙で綴るハートウォーミングな物語。1999年のカンヌ国際映画祭監督週間に正式出品されるや大喝采を受け、本国イギリスでは11月公開後、『シックス・センス』に迫る大ヒットとなり、BAFTA (英国アカデミー賞) 最優秀英国映画賞をはじめ数々の映画賞を独占。さらに翌春のアメリカ公開では、当初の4館から、評判が評判を呼んでついには157館にまで拡大公開されてロングランヒットを記録。この成功に対して今年度カンヌ映画祭では記念すべき第1回メディア賞 (最も興行的に成功した前年度出品作の新人監督賞) が、監督のダミアン・オドネルに与えられた。(一部改変)

#### ▼原作・脚本 Ayub Khan=Din (アユーブ・カーン=ディン)

ソルフォード生まれ。85年、ハニフ・クレイシ脚本／スティーヴン・フリアーズ監督による傑作『マイ・ビューティフル・ランドレット』で小さな役 (ランドリーで本を読む学生) を得た後、『サ

ミー&ロージー／それぞれの不倫』(87)のサミー役でシャシー・カプール(本作の劇中映画で登場)の息子役に大抜擢され、映画初主演。この後、本作のもととなった自伝的な戯曲《East is East》を完成させる。この戯曲は96年バーミンガムで初演された後、ロンドンのロイヤルコート劇場での上演が決まり、映画版にも出演している舞台女優リンダ・バセットらの好演もあわせて絶賛され、最優秀ウェスト・エンド戯曲賞と最優秀新人作家賞英国作家組合賞を受賞し、オリヴィエ賞最優秀新人作家賞候補にもノミネートされた。99年にはニューヨークでも上演され、大絶賛された。97年に映画化が決まり、自ら映画用に脚色し直す。こうして完成した本作『ぼくの国、パパの国』はロンドン映画批評家賞の年間最優秀脚本賞を受賞し、BAFTA(英国アカデミー賞)脚本賞の候補ともなった。99年はロイヤルコート劇場の委託で《Last Dance at Dum Dum》を執筆。7月、改装中の劇場に代わってアンバサダー劇場でスチュアート・バージ演出、シーラ・バレル、マダー・ジャフリーらの共演で上演された。アユーブは現在、白人女性のアルツハイマー患者についての作品に取り組んでいる。(一部改変)

戯曲版『ぼくの国、パパの国』(鈴木小百合訳)白水社 2001

## ▼主人公・カーン一家

父…ジョージ・カーン：オーム・プリー

母…エラ・カーン：リンダ・バセット※

長男…ナジール：イアン・アスピナル

二男…アブドゥル：ラージ・ジェイムス※

三男…タリク：ジミ・ミストリー※

四男…マニーア：エミル・マワ※

五男…サリーム：クリス・ビソン※

長女…ミーナ：アーチャー・パンジャビ

六男…サジ(サジット)：ジョーダン・ルートリッジ

アニーおばさん：レズリー・ニコル※

(※舞台でも同役を演じている)

## ▼あらすじ(公開当時のパンフレットより)

1971年、マンチェスター、ソルフォード。若き日に移民したパキスタン人のジョージは、イギリス人のエラと結ばれて今や7人の子持ち。自宅のそばで「ジョージのイングリッシュフィッシュ&チップス」というファストフード店を営んでいる。ジョージは、息子や娘たちを立派なイスラーム教徒に育てたいのだが、ソルフォードのパキスタン人は彼ひとり。子供たちの日常会話はもちろん英語だし、

イスラーム教を学ぶのもイヤがる始末だ。

長男ナジールの結婚式の日。ジョージは、息子がパキスタンの伝統のお見合い結婚をすることが誇らしい。ところが……。式の最中に、突然ナジールが逃げ出した。結婚式は大混乱! 何たる恥、とジョージは頭を抱える。家族全員の写真が飾られた部屋の壁から、ナジールの写真が取り外された。ジョージは家族に「長男は死んだ」と宣言する。

それから6ヵ月後。子供たちが、イスラーム教の勉強にモスクへ出かけた日のこと。中庭で未っ子サジが他の少年たちと「オシッコ飛ばし競争」をしていると……。皆がサジの××××にびっくり。何の騒ぎかと覗きにきたイスラームのムッラー(先生)もびっくり。イスラームの教えにそって割礼したはずのサジの×××××がまだ“皮被り”だったのだ! 事情を聞いたジョージは、またも頭を抱えた。☆

いやがるサジをなだめすかしての割礼手術。パパはサジに「ごほうび」だといってアラビア文字の時計をプレゼント。しかし、ママのエラは、手術の痛みでぐったりした小さな息子を見てふと考える。自分がイスラーム教の夫と結婚したせいで子供たちは……。「あの子たちにとって、私はいい母親なのかしら?」と妹のアニーにぼつりと呟いた。☆

一方、パパのジョージはイスラーム文化になじもうとしない子供たちのことを悩み、ムッラーに相談。ムッラーは、二男のアブドゥルと三男のタリークを、パキスタン人街ブラッドフォードに住む同胞シャーの愛娘とお見合い結婚させてはどうかとジョージに勧める。

ブラッドフォードへ映画を見に行こうと家族を誘うジョージ。パキスタン人ばかりで、パパにとつては天国のようなブラッドフォードも、家族にとっては外国のようなもの。それでも、道すがら、車の中で昔話をして笑いあうパパとママを見て、子供たちも幸せそうだ。しかし、ジョージのほんとうの目的は知り合いの家で、お見合い相手のシャーさんに会うことだった。

その夜、エラは、ジョージがまた2人の息子を結婚させようとしていることを知り、口論となる。たまたま部屋の前にいたサジは、兄弟の誰もが知らない2人の兄の結婚話を聞いてしまうのだった。

そしてある日。よくある兄弟喧嘩のさなか、いつも顔をすっぽり隠しているパーカのフードを兄たちに取られそうになったサジは、その秘密のお見合い話をバラしてしまう。呆然としてパパとママの部屋に飛び込んだタリークが見たものは、あのナジールの時と同じパキスタンの花婿衣装……。もう我慢できない。家出してやる! 鞆ひとつで飛び出したタリークの後を、五男坊のサリーム、妹のミーナ、タリークに首ったけのステラ、その親友のペギーまでがくっついてくる。5人の頼りは、今はエクルズに暮らすナジール。

ところが、行ってびっくり。彼はおしゃれな帽子デザイナー「ナイジェル」になっていた。しかもどうやら、共同経営者の男と暮らしているらしい……。結局、家出は無理と、ナジールの車でソルフォードの我が家へ送られる5人。ナジールの元気な姿を見てママのエラは喜ぶが、パパに見つかつては火に油と、すぐに立ち去らせる。

そして、いよいよタリークとアブドゥルのお見合いの日。シャーさん一家がやってくる。ジョージもエラも、そして子供たちもこの日までの衝突を笑顔の下に隠して、シャーさん一家を迎える。ところが、

カーン家を見下したようなシャー夫人の態度に、ついにエラの怒りが爆発し、お見合いも決裂。今度はジョージがエラに腹を立て、烈火のごとく怒り出し、手を上げようとする。その瞬間、今度は子供たち全員が身を投げ出してママを守ろうとする。そして、一家全員の組んずほぐれつの中、何かの拍子にサジの大事なフードがちぎれてしまう。一瞬、静まり返る家族たち。泣きながら部屋を出ていくサジ。そしてジョージも、打ち負かされたように家を出ていった。家族はもうバラバラになってしまうのだろうか。

物置きに閉じこもるサジをなぐさめ、「もうフードはいらないね?」と聞くアブドゥル。泣きながらも「うん」と答えるサジの表情は少し大人びて見えた。☆

一方、フィッシュ・アンド・チップスの店に、ひとり寂しく座り込んでいるジョージの元へは、エラが何ごとともなかったように入ってくる。そして2人はいつものように何気ない会話を交わす。「紅茶を入れる?」「ああ、カップに半分な」。(一部改変／☆のシーンは本日は省略)

## ●作品に見る多文化共生と異文化衝突

### ▼英国労働者階級の暮らしぶり

古い集合住宅……トイレ・風呂のない家

個室のない寝室……兄弟・姉妹同士が同室・同床

プライバシーのない生活

### ▼反イスラーム感情

割礼……ユダヤ教も含めて中東地方の習慣

一夫多妻制……移民としてやってきて、イギリス女性と結婚

許嫁婚……当日まで相手の顔を見たことがない

食物禁忌……豚肉食、酒

### ▼反移民感情

隣家の白人頑固老人、娘は三男のガールフレンド、長女に憧れる少年

移民反対論者イノック・パウエル議員（保守党）の応援

### ▼国際結婚

故郷に残した第一夫人（「ナンバーワン」を呼ぶぞ）

パキスタンに嫁いだ娘と会えない（イギリスで結婚、やがてパキスタンへ）

ハーフへの差別（「パキが来たぞ」）

### ▼英国化したムスリム（子ども世代）

服装・髪型

音楽（ロックンロール）

豚肉食（ソーセージ）と飲酒（バー）……酒の飲み方を知らない

モスクでの礼拝や聖典クルアーンの軽視、嫌悪

恋愛結婚……非イスラーム教徒との結婚

母語は英語……家族のなかで父親一人がパキスタンなまり

### ▼移民一世（親世代）

白人中心主義・差別のもとでの苦難

英国女性との結婚でつかんだ生活……店も家も妻の名義

パキスタン人だけの地域コミュニティのつながり

ムスリム・ムスリマ（イスラーム女性）らしさの押しつけ

パキスターニ・イングリッシュ……独特の発音（巻き舌、thがそり舌音になる）

反インド感情……印パ戦争・サリー

### ▼原題：east is east（東は東）

ラドヤード・キプリングの詩「東と西のバラード」

Oh, East is East, and West is West, and never the two shall meet,  
Till Earth and Sky stand presently at God's great Judgment Seat;  
But there is neither East nor West, Border, nor Breed, nor Birth,  
When two strong men stand face to face, tho' they come from the ends of  
the earth.

おお、東は東、西は西、そして両者はけっして会うことがないだろう、

大地と空がやがて神の偉大な審判の座に立つまでも。

しかし東もなければ西もない、国境も、種族も、素性もない、

二人の強い男が面と向かって立つときは、両者が地球の両端から来たとしても。

『ノーベル賞文学全集 1』より

## ぼくの国、パパの国

アユーブ・カーン＝ディン著

鈴木小百合訳／白水社

カンヌ国際映画祭などで高い評価を受け、日本でも一月から公開されて話題となった、同名の映画の原作である。といつても、小説ではない。戯曲である。

九六年の初演以来、英国各地やアメリカで上演され、絶賛を浴びているという。

主人公は、マンチェスター郊外でフィッシュ・アンド・チップスの店を営む、パキスタン人の父親。二次大戦前に移民として渡英し、英国人女性との間に六男一女をもうけたが、ことあるごとにパキスタン流を押し通そうと、意地を張る。モスクへ礼拝に連れて行き、ウルドゥ語を習わせ、娘にはベールを強要。息子たちの結婚相手も勝手に決めてしまう。作者の父親がモデルとなっているそうだ。

いつぼう、すでに英語が母語となっている子どもたちにとっては、そんな頑固おやじは反発の対象でしかない。豚肉の

ソーセージにかぶりつき、長髪にしてロックを聞き、パブで酒を飲む。

最初のうちは登場人物が多くてとまどったが、物語の進展につれ、息子たちの個性の違いや父親への接し方の微妙な差などがにじみ出てきて、作品の奥行きが深まっていく。お茶目な娘や汚いパーカを着たきりの末っ子が要所で活躍して、舞台を盛り上げる。そしてなによりも印象的なのが、移民の夫とハーフの子どもたちという二つの異文化の狭間で自らの生き方に悩む、母親の存在だ。

知り合いのパキスタン人の家庭がそのまま描かれているように一氣に読んでしまったが、イスラム文化になじみがなくても、普遍的な家族の物語として、また英国らしい機知に富んだ現代的なコメディイーとして、だれでも楽しめるだろう。

作者自身が脚本を担当した映画も、よくぞここまで映像化したと感心させられたが、登場人物の内面への迫り方では、シンプルな戯曲のほうが味わいがある。ぜひ舞台も観てみたい。